

小林多喜二

と

荒木優太

埴谷雄高

● アクティヴィストとひきこもり

ここに、二人の作家がいる。一人は、『蟹工船』や『党生活者』といった日本プロレタリア文学を代表するテクストを書き、実生活でもプロレタリア解放の革命を目指して政治運動に尽した。その果てに体制から拷問死を与えられ、一部の団体では今日でも偶像視され続けている戦前の作家だ。もう一人は、若い頃、やはり革命を目指し政治運動に参加したが、その後、政治から撤退するようにほとんどひきこもって『死霊』という大長編一作の創作にだけ身を捧げた。その特異な思想からやはり一部から偶像視されてきた戦後の作家だ。

小林多喜二と埴谷雄高。本書は、この二人の小説家／運動家という二面性が色濃く残っているテクストの比較検討を通じて得られる共通テーマについての考察である。しかし何故、この二人が対象となるのか。両者を俎上に議論を展開する研究が皆無である以上、その問いは至当だ。

例えば、もっと別の対の組み合わせを考えることもできるし、事実、様々な対が研究されてもきた。小林多喜二と志賀直哉、小林多喜二と蔵原惟人、小林多喜二と宮本百合子。或いは、埴谷雄高と吉本隆明、埴谷雄高と武田泰淳、埴谷雄高と高橋和巳。二つの作家研究史上で言及されてきた典型的な対の考察が多く、その成果を残している。その中で、小林多喜二と埴谷雄高という新規の対を提案することの意味は果たして何処にあるのだろうか。

その理由は二つに分別することができる。

第一の理由からみていこう。どうしてこの二人なのか。端的にそれは、二人がある時代の同じ組織に属していたからだ、と答えることができる。即ち、戦前共産党、特に非常時共産党と呼ばれる昭和六年から七年にかけての時期の非合法政治組織に二人は属していたのだ。

既に代表作を複数発表し一人前のプロレタリア作家として認められていた小林多喜二（当時二七歳）は昭和六年の一〇月、日本共産党に入党、作家同盟の黨員になる。一方の埴谷雄高（当時二一歳）は同じ年の春、既に共産党に入党していた。しかし、このような理由は些か説得力に欠けるかもしれない。というのも、埴谷は翌年治安維持法の嫌疑によって逮捕され、監獄生活を送る中で次第に党との関係は薄れていくことになり、他方、翌々年、多喜二はやはり逮捕され、それ以上に特高からの拷問を受けて最終的に死んでしまう。

このように彼らの接点は、極めて僅かな時間に限定されるし、しかも両者には直接的な面識はなかったように思われる。例外的に、埴谷雄高の回想文「或る時代の雰囲気」（『新日本文学』昭三三・四）がその奇跡的な接触の機会を微かに書き留めている。二人は「同時代に偶然同じ地域にいた」。それでも尚、両者は顔を合わせていない。回想文が伝えているのは、昭和七年二月、埴谷が逮捕される直前のこと、埴谷は仲間と共に組織のカンパを集める為、協力的な文学者の自宅を訪問することになり、その中に小林多喜二が目標の一人としていた。けれども訪問時、多喜二は留守であったのだ。

しかし、両者に面識がなかったとしても、同じ空気を吸い、その雰囲気の中で文学／政治活動の核を形成していたことは疑いようがない。実際、それは両者のテキストに表出される類似したテーマが証明している。しかも、両者は、同じ非常時共産党に属していながら、一方は政治的闘争の中で党の為に殉死し、他方は政治に失望し、やがて新左翼知識人として既存左翼や共産党を批判していくという興味深いコントラストを描いている。

● 多喜二のリーダビリティ

二人のコントラストは、両者の文学テキストに関する基本な態度にもよく現われている。

小林多喜二は、全文が壁に貼り付けられるくらい短い「壁小説」という手軽に読める小説ジャンルのテキストを複数発表している。この営みがよく示しているように、多喜二はテキストを流通させることに強い関心を払っていた。時流的な文脈を踏まえれば、「芸術は大衆化されねばならないという命題と、しかしすぐれた芸術が必ずしも大衆に受け入れられるとは限らないという現実との間の溝をどう埋めるか」【一】が論議された、昭和三年に蔵原惟人と中野重治とが口火を切った芸術大衆化論争に多喜二が感化されていることは間違いない。だが、彼程にその論争の内実を実際の執筆活動に活かそうと、読者がテキストに接近しやすくなるような工夫を凝らした作家は少ない。

『テガミ』、『争われない事実』、『疵』、『級長の願い』、『父帰る』といった一連の「壁小説」の試みの他、「仕事の合間合間に寝ころびながら読んでほしい」というエピグラフをもち細かい章節分けでとっつきやすい長編小説『不在地主』、同じく長編であるのに改行が多く通勤時間で手軽に読めるような「電車小説」【二】の『オルグ』、「単純な「戦旗」発表作家であってはならない」【三】という媒体横断意識等々、一時期以降の多喜二の関心は、テキストのリーダビリティ（読みやすさ）を高めていくことに集中している。それは革命を目指すプロレタリア文学が貧農や工場労働者といったプロレタリア自身に受け入れられなければ目的が遂行されないという危機感があったからだ。

多喜二のリーダビリティは翻訳の多さによっても推し量ることができるだろう。多喜二が活躍する只中、名作『蟹工船』は発表の約一年後の昭和五年に早くも中国語訳（潘念訳、上海大江書舗）が出版され、翌年には『一九二八年三月十五日』がドイツ語（国崎定洞訳、ドイツ・モップル出版所）で続いて翻訳される。以後、その流れは途絶えることなく、多喜二の死後もロシア語、英語、チェコ語、韓国語等、各国語に訳されている。訳の対象も、『蟹工船』や『党生活者』といった有名テキスト以外に、知名度の低い『安子』や『沼尻村』、（選集や短編集といった形での）細かいテキストにも着手されている。勿論、当初この現象はプロレタリア文学を大衆を運動に煽動する為の手段として、端的に言えばイデオロギッシュな意図の下企画された部分が少なくない。只、それ以上に、そもそも多喜二のテキストは全般的に改行が多く、入り組んだ構文や難解漢字は使われず、そこに翻訳しやすさを見出す読者がいても不思議ではない。

● 埴谷のノンリーダビリティ

多喜二とは反対に、埴谷雄高はテキストのリーダビリティに殆ど関心を払わなかった作家だ。それは客観的にみれば、意図的にリーダビリティを排除しているという印象さえ与えかねないものだ。

戦後すぐ、昭和二一年から『近代文学』で連載が始まった埴谷唯一の長編『死霊』は、昭和二四年（第四章未完）で中断した。謎めいた三輪家四兄弟を中心に、登場人物達の形而上学的な思弁的対話劇で進行していく日本近代小説に稀有な小説『死霊』は第三章迄が単行本になってその前年に真善美社から刊行されたが、その後、作者の病等の事情によって二五年程の長い断絶期を経ることになった。四章以降は続刊時に再刊するという作者の約束が守られたこともあって、絶版となった『死霊』本は、古本屋で高値がつき、入手困難な伝説のテキストとなった。埴谷の宅には、海賊版刊行の許しを請う為若い男が来訪しに来ることさえあった【四】。二五年ぶりに第五章が発表された『群像』（昭五〇・七）が発売初日で売り切れ、重版するという記録的な事件を起こしたのも、テキストが入手困難であるという出版状況を含めた埴谷のノンリーダビリティが伝説性と希少感を煽った結果だと考えることができるだろう。

『死霊』のノンリーダビリティは、小説執筆を再開した後年にも発露してくることになる。埴谷は文庫という出版形式の特徴が時を経ても価値を失わない古典であることを譲らず、生前『死霊』の文庫化を決して許さないで、どうしてもしたいなら、作者死亡の五〇年後に、という約束を結んでいた【五】。

実際には、平成一五年二月、講談社（講談社文芸文庫）によって約束した年数よりもずっと早く文庫化され、その約束は反古になってしまったが、少なくとも読者の読み易さを配慮する意識は埴谷自身にとって皆無だった。

そもそも、『死霊』の文体自体、「自序」の言葉を借りるなら「極端化と曖昧化と神秘化」に貫かれ、一本書でもこれから多く引用するが――それは読者の理解を助ける処か、寧ろ混乱させる程の難解さ、特に後半部では、冗長さや韜晦に近いものと化している箇所は少なくない。この態度は大衆志向の意識からは程遠い。因みに、埴谷テキストの翻訳は、今日の時点にあって、雑誌にいくつか載っただけで単行本化された訳本は存在せず、その中でも抄訳が多い。代表作『死霊』の翻訳は第五章がフランス語（ジャック・レヴィ訳）でやはり抄訳されているに過ぎない【六】。

同じ時代の同じ組織の雰囲気を経験しながらも、一方の作家は大衆に向き合い、他方は大衆から距離をとるような素振りを見せていった。小林多喜二と埴谷雄高は、非合法政治組織の「雰囲気」が生み出した極端な二つの作家サンプルとして捉え直すことができる。そして、その極端な二つの視点から生れたテキストを用いることで、文学活動に圧倒的な影響を与えた一時代の政治組織について、立体的に考察することが期待できる。これが第一の理由だ。

本書では、組織というものを実際の歴史的区分というよりも政治組織成員の散在（散らばって在ること）と混在（混ざり合って在ること）という二つの運動の相に分けて、前者から後者へ連続する形で分析している。それは、両作家の文学テキストが呈示している組織像が、局在的に限定されない動的な様相を呈しているからであり、散在から混在という運動の印象の変化の過程が

、組織の成立と発展、そして瓦解の過程を要約しているからだ。これは主に第一章と第二章で考察される。

● 「政治と文学」論争粗描——政治的多喜二像

第二の理由は「政治と文学」というテーマに関わる。「政治と文学」論争とは、プロレタリア作家である中野重治と『近代文学』を立ち上げた若き批評家の荒正人&平野謙の間で繰り広げられた、文学の政治利用のあり方についての論争だ。

荒正人は創刊したばかりの雑誌『近代文学』の寄稿第一作に評論「第二の青春」（昭二一・一）という評論を載せた。そこでは自身もそうだった左翼運動への傾斜に、反ヒューマニズム性を読んだ。つまり、そこでは社会変革を謳う共産主義に関する思想だけが「人間判断のものさし」となり、「一切を敵か味方かといった分類でしか眺めることができな」くなっていたのだった。やがて共産党が、脱落者、裏切者、スパイ、分派等で解体していくとその甘い政治運動の「青春」は敗れ去り、非人道的振る舞いと単なる醜い「エゴイズム」だけが残った。そこに眼を遠ざけてはならず、そのような条件下から改めて「第二の青春」が始まらなければならない。これが荒の主張だ。ここには個人主義の肯定とそれを縛る集団の政治党派への疑問が表現されている。

その三ヵ月後、平野謙は論争の直接の火種となった評論「ひとつの反措定」（『新生活』昭二一・四）を発表した。平野によれば、政治は手段と目的を分離させて、目的のためには手段を選ばないというマキャベリズムをもつのに対し、文学は「目的にむかって歩一歩とにじりよる過程そのものが、いわば目的自体」であるが故に、両者は相容れないものだ。しかしマルクス主義運動の中ではしばしば文学的過程主義は無視されて、文学は運動に人々を巻き込む煽動の道具と化してしまう。即ち、「政治の優位性」の成立であり、それを直接担ったのが昭和初期のプロレタリア文学だ。ここで、政治の犠牲となるのが、例えば戦前共産党員と共に生活することを強いられた女性党員、ハウスキーパーであり、平野はここに旧左翼の反ヒューマニズムを見る。

既にプロレタリア作家として活躍していた中野重治は「批評の人間性1」（『新日本文学』昭二一・四）を発表し、『近代文学』の若き批評家二人に対して「荒や平野は宗匠根性におちている。人間の擁護、芸術の防衛を看板にした宗匠根性は非人間的であり、反人間的である。人間的にそれはいやしい」と、手厳しい評価を加えた。こうして今日、図式的な格好としては荒&平野は政治に従属しない文学の自立性を強調し、中野はその不可分性を強調したように整理される論争が始まったのだった。

ここで大きく焦点化されたのが、本書の主役の一人である小林多喜二であり、とりわけ彼のテクストに登場する女性の取り扱い方が問題となった。遺作の『党生活者』（初出の題は『転換時代』、『中央公論』昭七・四～五）では、国家秩序を乱すものを取り締まる特別高等警察（略して特高）に隠れながら共産主義運動を続ける党員「私」（佐々木安治）の眼差しによって二人の女性が対照的に取り扱われている。つまり、自分を犠牲にして迄組織活動に熱心な女同志の伊藤ヨシと組織活動の重要性を理解せず私生活を優先してしまうハウスキーパーの笠原の対照だ。ハウスキーパーとは非合法時代の共産党の運動で男性党員が特高からの眼をくらす為一般の

家庭の妻のようにみせかけて住居を共にした女性協力員のことを指すが、「私」はその笠原の家を間借りしているにも関わらず、彼女のタイプライターの仕事が（「赤」、つまり共産党関係者ではないかという）噂によって首になったと聞くと、生活を続ける為に彼女にカフェの女給の職を勧める。平野謙がいう処の「目的のために手段を選ばぬ人間蔑視」がここにある。荒の言葉遣いならば「非人間的な、功利主義的な女性蔑視観」【七】ということになる。

『近代文学』派にとって、小林多喜二というプロレタリア作家は文学を政治に従属させる政治至上主義を象徴している。政治的目的（例えばマルクス主義革命）の為には、文学は政治に奉仕すべきだし、個々人の多少の犠牲は止むを得ない。中野重治はその解釈に偏向性を見出し、『党生活者』の女性問題を取り上げるのなら例えば「私」の母子関係の「パセティックなくだり」【八】を無視していることは不当だ、といった形で反論する。

● 「政治と道德」としての「政治と文学」

三者の文章応酬は以後も続き、それは他の評論家や作家に波及していくが——平野謙に関しては第一章で立ち返るものの——それを細かに追うことはしない。しかし、一つ留意しておくならば、前述でも既に頻出し、その雰囲気を与えている「人間」という語彙は無視できない。「政治と文学」論争で議論になっているのは、殆ど、人間性（ヒューマニズム）の所在である。『近代文学』派が『党生活者』を批判するのに用いたのは、ヒューマニズムの観点であり、その点から過去の非道な政治活動やプロレタリア文学運動が断罪される。しかしながら、論敵であった筈の中野重治の方も又「人間」性を武器に論戦していることは見逃せない。「人間的な政治を人間的に空想することのできぬ批評家」と「批評の人間性1」で平野を揶揄し、或いは『党生活者』の母子関係に注目した前段の論文では、「近代的、人間的を彼らは与えられるものとして求めている。われから作りだすものとしてはつかんでいない」と荒&平野を批判している。

勿論、中野は荒&平野に反論する形をとっているのだから、「人間」性に焦点を合わせることは自然かもしれないが、少なくとも結果としての論争内容を通読してみれば、「政治と文学」論争というその命名には、はっきり言って不適當な点があると言わざるをえない。「政治と文学」論争で問題になっているのは厳密に言えば、政治とヒューマニズム、より敷衍すれば、政治と道德というカント以来の古典的な二項対立だった。イマヌエル・カントは『永遠平和のために』の中で、政治は道德法則に従属せねばならず「人間の法は神聖なものでなければならない、たとえ支配する権力にどれほど大きな犠牲を払わせようとも」【九】と主張していたが、例えばこの発想と同根の他者を手段としてのみならず目的として扱えというカントの有名な道德律に、『近代文学』派のヒューマニズム論の原型を認めることは難しくない筈だ。社会学者マックス・ヴェーバーならば、このような道德主義に反駁し、政治家に求められるのは道德に反する一切の行為を否定する「心情倫理」ではなく、必要とあらば道德を踏みじつても政治目的實現を果たそうとする「責任倫理」であると説く【一〇】。このような二項対立は思想史にありふれている。

だからこそ、戦後直後の「政治と文学」なる問題設定には一個の飛躍があったとっていい。即ち、文学とは当然ヒューマニスティックで且つ道德的な芸術ジャンルで、それは政治に対立す

るものであるという何の根拠もない前提である。ここで問いたいのは、彼等の文学定義への臆見ではない。言葉の定義づけそのものへの批判は、使用者の自由を認めた瞬間、全てが定義論争に終始し不毛なものに終るからだ。そうではなく、問われるべきなのは、政治から独立した文学の価値を認めているようにみえていた『近代文学』派は、別の視点からみれば、伝統的にある（カント主義的な）道徳性に文学を従属させることで政治による支配から逃走していたのではないかと、別様の文学従属論の密入である。実は、『近代文学』派は文学固有の領域を主張していた訳ではない。彼らは既存の伝統的古典的二項対立の図式を一時的に借り受けることで、一時代の政治主義に対抗しようとしていただけだ。

戦後の「政治と文学」論争に於いて、文学固有の領域——そういうものがあると仮定して——は基本的に無視されていた。問われていたのは、文章を書く者の政治性と道徳性の相克であり、それは「政治と道徳」の対立図式で十分対処可能であり、実際対処してきた。時折、文学が問題になったとしても、その磁場では最終的に道徳問題へと回収されてしまう。しかし、そもそも文学は本当に道徳に従属するものなのか。定義如何にしる、けれども『近代文学』派とは別の仕方、道徳に従属しない文学の領域を考察することができるのではないか。実際は「政治と道徳」論争であった歴史過程、そして文学とは悪を表現するものであるという批評家の言葉【一一】を知れる今日、「政治と文学」論を改めて設定し直すことができるのではないか。これが本書の基本的な問題意識である。

● 政治から遠く離れて——小説家埴谷雄高

処で、注意していいのは文学の独立した価値を訴える陣営の主要な論客二人が共に生粋の批評家であったということだ。二人は文学の価値を訴えながらも実作を通じてそれを表現することはなかった。

勿論、その事実によって——小説等の創作を書いてない批評家なのだから文学のこと等分らないに決まっている、といった仕方——『近代文学』派の主張の是非を問いたい訳ではない。しかし、新たに希望された政治に従属しない文学とは具体的にどのようなものであったのかを考えることは「第二」という冠をつける以上、必須である筈だ。荒正人の「エゴイズム」の観点から見直される夏目漱石への高い評価や、論争中に平野謙が提示した「末期の眼」を獲得した「文学的」芥川龍之介像等は、過去に例示を求める批評家らしい形で間接的にその問いに答えている。しかしそこで登場してくる小説家とは何れも昭和初期のプロレタリア文学以前の（正に、「近代文学」的な）明治大正期の作家であり、素朴に考えて、批評的再読の要請が「第二の青春」に相当するのだ、という主張に些かの倒錯を感じても不思議ではない。その試みは、第一の青春を相対化する為に更に遡行して見出される、或る基層の探索、そして再発見の営みであり、第一の後続としての「第二」性というよりも青春そのものの前提を問う作業であるからだ。

『近代文学』の批評家二人は文学の独立性を主張しながらも、自身らで小説を残すことはなかった。荒の言葉遣いを借りれば、彼らが実質探求していたのは「青春」のゼロ度である。その傾向性は、小熊英二が述べるように『近代文学』という雑誌名自体が象徴している【一二】。何

故なら、昭和一四年末、荒や平野を含めた『近代文学』派の前身となる同人達は、雑誌『現代文学』を創刊していたからだ。『現代文学』から『近代文学』へ、ここに彼等の遡行的批評性が端的に表れている。

本多秋五、佐々木基一、山室静、小田切秀雄等、初期『近代文学』を代表するような批評家は荒や平野の他にも数えることはできるが、生粋の小説家の同人となると難しい。同人の多くは小説家というよりも批評家だった。しかしながら、『近代文学』派の一人として数えられながらも、飽く迄小説家として自分の仕事を展開し、荒&平野的批評の内容自体には共感を示すものの、そのスタイルからは距離を保ち続けていた異質な書き手も存在していた。それが、本書もう一人の主演、埴谷雄高である【一三】。

当然、埴谷には評論や文芸批評のジャンルに属する仕事も存在している。とりわけ、スターリン批判によってソ連崩壊を予言したかのような伝説的な評論「永久革命者の悲哀」等は埴谷の代表作として今日でもしばしば参照される。しかし、埴谷自身が語るように、本来それらは一個の独立した仕事というよりも、『死霊』という長編小説に組み込まれる筈だった複数のアイディアであった【一四】。実際、病気の都合から長期間『死霊』を中断してしまった後、二〇数年ぶりに再び『死霊』に着手した経緯等からは、並々ならぬ執着が認められる。芸術至上主義的に「政治と文学」論の破綻を訴え『近代文学』派に対し擬似問題を提起したとして批判的であった奥野健男が、しかし同人の埴谷雄高だけを三島由紀夫と肩を並べるように高く評価しているのもそこに原因があるだろう【一五】。

とりわけ、埴谷は他の『近代文学』派とは違って、日本近代文学からの影響を（少なくとも表面上の振る舞いでは）無視していたことは注意していい。自身の文学的資質を形成する際に、名が挙がるのは、常にドストエフスキーを筆頭とする海外文学、或いは、シュティルナーやカントといった西洋思想である。カントにしても、『実践理性批判』、つまり道徳論に言及することは少なく、専ら独房で読んだ『純粋理性批判』の認識論や形而上学から受けた震撼を埴谷は強調する【一六】。平野や荒のように過去の日本近代文学史の一覧の中から適当な文学者を選択するというような批評方法を埴谷は殆ど採用しない。この点でも他の同人に比べ異色な性格を見せている。

そして何より、埴谷程、意図的に政治から遠のこうとした『近代文学』派はいなかったといっている。戦後、「死んだふり」【一七】と称してあらゆる政治活動から身を引き、場合によっては、デモや選挙といった（生命に関わらないという意味で）気軽な政治参加に疑問を呈する文章さえも書いた【一八】。「今日文学に携わるものが、とにかく政治はもう御免だよと放言しがちだとしても、あながちとがめらるべきではない」（「ひとつの反措定」）と述べていた同人の平野でさえ、晩年は世田谷の区画整理反対という住民運動の代表者に自らなっていたことを考えるとその「御免」は徹底的であったといえる。埴谷の反政治的な姿勢から逆に見えてくるのは、「文学」への高い期待度である。

この文学へ特別集中していた作家の文学観を元に、再び多喜二のテキストを捉え返すことで、「政治と文学」論争の再考のきっかけをつくることができる。これが比較の二つ目の理由だ。つまり、道徳に邪魔されてしまった「政治と文学」という問題設定を二人のテキストを元に、論争

の名に相応する形で立て直すという試みだ。これはとりわけ、埴谷の純粋文学的な成果を主として論じる第三章が導入の役割を果たして、第四章の最後で考察される。

● 小林多喜二「と」埴谷雄高

政治的な小林多喜二、そして文学的な埴谷雄高。本書は日本近代文学史に登録されたこの二つのイメージをきっかけに両者のテクストを読んでいく。いってみれば、第一の理由は文学テクストに描かれた政治（組織）について、第二の理由は政治カテゴリーに対峙した文学という創作ジャンルについての考察と要約でき、それぞれ「政治と文学」という結びつきの内容面と形式面の考察に相当しているといえる。結論を先取りすれば作家の固定的なイメージは、両テクストに見られる共有領域の存在によって攪乱されることになる。しかし注意しておきたいのが、それは所謂影響関係によって生じているものではないということだ。焦点化されるテクストの内実は本書第一の理由であった一時代の政治組織が生んだ意図しない符号や応答である。多喜二と埴谷は極端な二つのサンプルに過ぎない。

加えていえば、既存のイメージを攪乱させるといっても、それは埴谷に独自の政治性を、そして多喜二に独自の文学性を見出すという仕方で行われる訳ではない。実際、佐古田修司は、「並みのオルガナイザーではとても身につけることができないようなぼう大な教養に支えられているがゆえに、実は本質的には現実を充分把握していない言葉であっても、無限に繰り出されてくるそのエネルギーにいつのまにか魅了されて、そこに何か偉大さと深遠さを感じさせることができる」「高級なオルガナイザー」【一九】として埴谷の言動を政治的に分析している。要するに、難解さの未知性がそのまま深遠さに演出され、逆に人々を牽き付ける、ということだが、例えば、日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派（俗に言う革マル派）の最高指導者だった黒田寛一の反スターリニズムに埴谷の思想が決定的な影響を与えたことはよく知られている。埴谷の意図がどうであれ、その言動が「政治」的に働いてしまっていたことは疑いようがない。吉本隆明は、埴谷が名前を自由に貸した結果、黒田の後援会長に就任してしまったことに疑問を投げかけ、公開状を発表している【二〇】。

或いは、平成二〇（二〇〇八）年、懸命に働いても裕福になれない非正規雇用やワーキングプアといった労働問題を先取りしているとして再発見された『蟹工船』ブームによって、多喜二は戦後第二のスポットライトを当てられたが、その二年程前に編まれた『「文学」としての小林多喜二』【二一】等は従来のプロレタリア作家像に回収されない多喜二の「文学」性を焦点化しようとする目論見が明確にあった。この特集は、凡庸なプロレタリア作家イメージに回収されない多喜二「文学」の魅力を伝えている。

要するに、既存のイメージからの脱出といった研究の試みは両作家共に既に認められるものであり、その成果がある以上、とりわけてその模倣反復を繰り返す必要はない。勿論、広くいえば本書もその末席に加わるものといえるかもしれないが、しかしこの本で従来の研究よりも重視しているのは、ある作家の隠れた別の側面の発見というよりは、ある作家とある作家の対によって初めて見出される共有領域であり、共振するテーマだ。

象徴的にいえば、小林多喜二と埴谷雄高、この「と」こそが本書の真の主役だといっている——そして政治と文学の問題も結局最後にはここに回帰してくる——。それは多喜二「か」埴谷「か」の選択を迫らないものと言い換えられる。それ故、本書はどちらが作家的運動家的に優れているか、ということ断言していない。多喜二と埴谷という限定された主観による変数を決して捨象することなく、テキストのその偏向性を含めて結びつく対の固有性、それが表現している世界を記述しようと努めた。その為には本書は、歴史的資料を参照するものの、客観的な時代研究や文化研究の類というよりも、二つの系列の文学テキストに認められる反響を解釈していくという、素朴な文学研究に相当している。その試みの成否は無論、読者諸賢に委ねる他ない。

【註】

【一】 林淑美「芸術大衆化論争における大衆」／『講座昭和文学史』第一巻収、有精堂、昭六三・二。

【二】 「四つの関心」、『読売新聞』昭六・六・一一～一五。

【三】 「プロレタリア文学の「大衆性」と「大衆化」について」、『中央公論』昭四・七。

【四】 「『死霊』の思い出」、『神戸新聞』昭四一・九・二九。

【五】 「文庫は五十年後になっても読む価値があるというのが基本条件だ。この五十年後は、百年後といってもいいのに、いま五十年後といったのは、死後五十年後に印税がなくなるからです」。埴谷+栗原幸夫『埴谷雄高 語る』、河合文化教育研究所、平六・四。

【六】 訳されたうちの四点は『埴谷雄高全集』別巻（講談社、平一三・五）で読むことができる。

【七】 「晴れた時間」、『文化人』昭二一・八。

【八】 「「党生活者」について」／『小林多喜二研究』収、蔵原惟人+中野重治編、解放社、昭二三・八。

【九】 付録、中山元訳、光文社古典新訳文庫、平一八・九。

【一〇】 『職業としての政治』、脇圭平訳、岩波文庫、昭五五・三。

【一一】 ジョルジュ・バタイユ『文学と悪』、山本功訳、ちくま学芸文庫、平一〇・四。但しバタイユにとって、悪を表現する文学は、道德の不在を素朴に意味する訳ではない。それは「超道德hypermorale」を要求している。

【一二】 『〈民主〉と〈愛国〉』第六章、新曜社、平一四・一〇。

【一三】 批評に偏った『近代文学』の性格は埴谷自身意識していたことだ。「「近代文学」は評論家が多くて小説が少ないので、ほかの人に書いてもらって小説を出した」、これは井上光晴との対談「真実とフィクション」（『国文学 解釈と鑑賞の研究』昭五六・一）での埴谷の発言。

【一四】 「この数年のあいだに私はいくつかの政治的なエッセイを書いたが、それらは、本来、すでにかかなり以前に途中で停止したまままだ仕上げられていない長篇のなかの或る章で触れられるべき予定されていた謂わば副主題の副主題ともいうべき位置を占める小主題なのであった」。「政治の周辺」、『群像』昭三四・五。

- 【一五】 「「政治と文学」理論の破産」、『文藝』昭三八・六。
- 【一六】 例えば、「カントとの出会い」、『カント全集』第三巻付録、昭四〇・一一。
- 【一七】 「あらゆる発想は明晰であるということについて」、『群像』昭二五・二。
- 【一八】 「デモについて」、『東京新聞』昭三四・一二・一四～一六。「選挙について」、『東京新聞』昭三五・一一・一〇～一二。
- 【一九】 『反埴谷雄高論』序論、深夜叢書社、昭五九・一〇。
- 【二〇】 「埴谷雄高氏への公開状」、『読書人』昭三七・五・二一。
- 【二一】 神谷忠考＋北条常久＋島村輝編、至文堂、平一八・九。因みに、巻頭の座談会（日高昭二＋小森陽一＋島村輝）は「「政治と文学」からの解放」というトピックで締めくくられている。

※書籍では注は本文のルビ欄に振られている。